

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2011.7.15 佐久考古学会

特集 しゃぐうじ たちゅうきょう 社宮司・多鈕鏡の再検討

佐久市原社宮司遺跡から発見された弥生時代の鏡片「多鈕鏡」の再検討に関する論考を特集した。

「多鈕鏡」は、国内では12例のみしか知られていない希少な鏡であり、他はいずれも西日本のみの出土で、なぜ信州佐久の地に遺されたか、大きな謎である。

★ 目 次 ★

社宮司の多鈕鏡……………	柳 田 康 雄	2
埋納状況の復元……………	小 山 岳 夫	4
社宮司遺跡出土の多鈕無文鏡をめぐって……………	小 林 青 樹	7
朝鮮半島からみた社宮司の多鈕鏡……………	宮 里 修	10
社宮司遺跡の多鈕無文鏡によせて……………	設 楽 博 己	13
社宮司遺跡の多鈕鏡・玉・鉄斧		
一括資料を考える……………	石川日出志	14

戦後間もない昭和25年（1950）前後、佐久市原、現在の野沢南高校の東側にあたる畑で耕作をしていた伴野ひで子さんは、土器の底に納められていた小さな銀色の金属片一片と、25点の管玉、緑色に輝く1点勾玉、錆びた鉄の塊りを掘り出した。

ご主人の伴野稀一郎氏は、当時野沢小学校教員だった白倉盛男氏にこの事実を報告、貴重な発見を予感した白倉氏は、東京大学の八幡一郎氏へ出土品の写真と計測値をすぐに送った。

弥生の多鈕鏡が約2000年の歳月を経て地上に現れ、ふたたび人々の注目を浴びることとなった経緯である。この場所は、社宮司遺跡と名付けられた。



社宮司の多鈕鏡・勾玉・管玉

Photo T.Ogawa

昭和27年（1952）に八幡氏が銀板と思しきものとして発表したのち、昭和41年（1966）永峯光一氏は、多鈕細文鏡の可能性が高いという指摘を『信濃』で行った。以降、社宮司遺跡出土の銀色の金属片は、大方に多鈕細文鏡の破片であると認識されてきた。

平成22年（2010）1月～2月、長野県御代田町浅間縄文ミュージアムにおいて社宮司遺跡出土品が公開され、柳田康雄氏、設楽博己氏、宮里修氏、小林青樹氏、深澤太郎氏、石川日出志氏ら何人かの弥生時代研究者が実見に訪れ、その後春成秀爾氏も実見した。

それは44年ぶりの見直し調査ともなり、実見された研究者の見解を、この特集において報告する。



社宮司遺跡の位置（長野県佐久市原）

社宮司遺跡の多鈕鏡

柳田 康雄

1. はじめに

多鈕細文鏡・勾玉・管玉・鉄器が土器に納められて出土したという（桐原 1963、永峯 1963）。現在個人所蔵であることから全部は調査できなかったが、今回、浅間縄文ミュージアムのお世話で鉄器と土器以外を観察調査できた。

2. 多鈕鏡の観察

多鈕細文鏡とされている破鏡は、長径4.23cm、短径2.4cmの大きさの中に、鈕1個と縁の一部が残っている。厚さは、縁1.85mm、中央最薄部0.85mm、鈕部3.0mmである。破鏡とは、破片となってから二次的に研磨され、マメツしたものをいうが、本例も両面のほぼ全面が研磨されており、金属質も錫分が多く、保存状態が良好である（写真1～6）。

鈕が円鏡の中央にないことから多鈕細文鏡とされている（桐原 1963、永峯 1963）が、わずかに背面の縁内側に鑄肌を残して、出土後の傷があるものの、文様がないことから多鈕無文鏡である。鏡面の破片中央部には、内湾した鏡面の原状が窺える。鈕は通例の多鈕細文鏡（写真7）と同じであつたらしいが、実際は写真3のように円孔になっており、現状では上部が研磨されて失われている。鈕上と平坦部に各1個の円孔が穿たれているが、最初に裏面から穿孔され、次に鏡面から若干補正されている。裏面平坦部には、その他に4箇所未穿孔痕跡がある。また、鈕の傍らには、鑄造時の鬆らしき半円形のアナが見られる。鏡面にも無数の鬆が見られる（写真1・2・5・6）。

なお、鏡片両面の付着物は布である可能性がある。

（國學院大學文学部）

参考文献

桐原 健 1963「信濃国出土青銅器の性格について」『信濃』第18巻第4号

永峯光一 1963「鏡片の再加工と考えられる白銅板について」『信濃』第18巻第4号



写真1 社宮司多鈕無文鏡



写真2 鈕付近穿孔と穿孔失敗痕跡



写真5 鏡面鬆と研磨痕跡

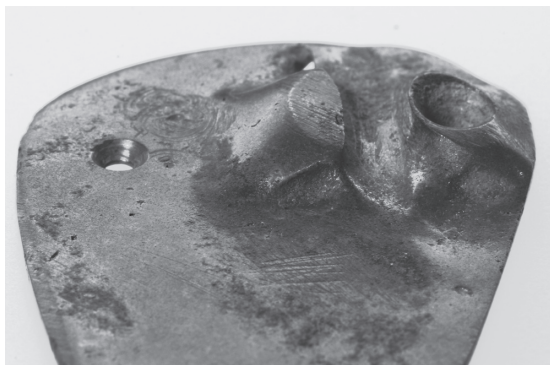


写真3 鈕側面俯瞰

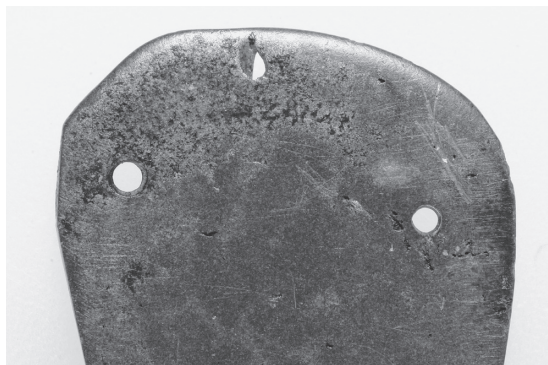


写真6 鏡面穿孔と周縁のマメツ



写真4 鏡片俯瞰



写真7 福岡市吉武高木3号木棺墓
多鈕細文鏡の側面俯瞰

多鈕鏡埋納状況の復元

小山 岳夫

1. はじめに

44年ぶりの見直し調査により、細文が刻まれた鏡から無文の鏡へと位置づけが変更され、再び脚光を浴びている佐久市社宮司出土の多鈕鏡に対する地元研究者としての役割は、時期決定の鍵を握る共伴土器の時期判定を行うことと、地元の利を活かして埋納状態を復元することである。以下に若干の考察を試みたい。

2. 多鈕鏡の属性

社宮司出土の多鈕鏡は破鏡された破片である。原形は直径約10cm程度の小型品であったと推定される。仮に均等に分割できたとすれば8～9枚の破片を取ることができる。破片の長さは4.2cm、形状はティアドロップのギターピック状である。割れ口、鏡面、鏡背を丁寧に研磨し、2ヶ所を穿孔して紐で繋いだときには鏡背が正面を向く垂飾に加工している。

詳細は、本誌の柳田康雄氏の論考を参照されたい。

3. 共伴遺物

ヒスイの勾玉1点、鉄石英の管玉15点、碧玉の管玉10点、鍛造の板状鉄斧1点とこれについていた不明鉄製品、弥生土器が出土した。ここでは埋納時期を決定の鍵となる土器の観察結果を報告する。

土器の評価のために、平成23年4月30日、佐久市文化財課で、当該の弥生土器の比較のため、西裏遺跡の中期後半・直路遺跡の後期初頭・北一本柳遺跡の後期中頃～後半・下小平遺跡1号周溝墓の後期終末～古墳初頭のいずれも壺・甕を観察した。

まず、中期後半・後期の甕は、いずれも煮炊き機能を重視した口径が広く、底径が狭いスリムな形態で社宮司の土器とは異なる。器の内面は水漏れを少なくともとめるために焼成前の半乾きの段階で木べら、竹べらなどで入念に磨きこむ。社宮司の土器内面は磨きこんだ形跡がない。以上の消去法から社宮司の土器は甕ではなく、壺の可能性が高いと判断できる。

社宮司の壺の形態は後期初頭の壺とは共通する部分もあるが、後期中頃以降の壺とは全く異なる。後期壺の内面は一樣に板状工具の深い櫛目調整痕が明瞭に

残っている（写真3）。いっぽう、社宮司の壺の内面調整は非常に細かい櫛目というよりも刷毛状の痕跡である（写真1）。観察個体が少ない状態で即断は出来ないが、後期＝吉田・箱清水式土器の壺の内面調整との共通性は少ないように感じられた。

中期後半＝栗林式土器の壺は、後代の吉田・箱清水式土器壺と同様に板状工具の櫛目調整を施すものが多いが、深い櫛目調整痕でなく浅い擦痕を残す調整を施した壺も少数ではあるが存在する（写真2）。社宮司遺跡出土土器の内面調整はこれと近似する。しかし、栗林式土器壺の内面調整は概して平滑で丁寧に施され器肉は薄いのに対し、社宮司の壺はごつごつしており、やや雑な感を受け、器肉も厚い。こうした相違点から中期後半の壺とは断じきれない状況である。

今回観察した栗林式土器は、同型式でも後半段階のものであり、前半段階あるいは栗林式土器の前段階の土器も観察してみなければならない。現段階では当土器は中期後半以前ではないかという漠然とした見解を示すに留まってしまった。今まで多くの研究者が結論を出さなかった土器である。一筋縄で解釈できる土器ではない。

4. 埋納状態の復元

社宮司の土器の内面をよく見ると端っこに偏ってサビがついている（写真4）。そこに鉄斧を乗せるとピタツとはまり、刃を上に向けて立った（写真5・6）。鉄斧が土器の中に立てられていたことはほぼ間違い無い。

ヒスイ製勾玉の片面や鉄石英・碧玉製管玉の一部をよく見ると錆がついている。この状況から玉類は鉄斧にくっついていたらと考えられる。多鈕鏡片には錆の付着は見られないが、銅という金属の性質が鉄錆の付着を阻止したと考えて良いのであろうか。

いずれにしても多鈕鏡片・玉類は装飾品という共通性をもち、土器とともに一括で掘り出されたことを考えると埋納当時は綺麗につながれていたと考えて良いと思われる。

ここからは、まったくの想像であるが、埋納された当時の復元を試みた。玉類と多鈕鏡片をややきつめにつないで見ると57cm、約60cmの長さになった。つなぎ方は考古学的な類例を確認したわけではないが、多鈕鏡とヒスイを中心にすえて赤と緑の管玉を組み合わせるときれいに見栄え良くなるのではという私の勝手な想像である（図1）。アクセサリーのデザイナーに再現してもらうのも良いかもしれない。

玉類を繋いだ長さ約60cmが現代人の帽子のサイズである。繋いだままだと頭でひっかかってしまう。首飾りとしてはやや短い、頭をかざるものであった可能性もある。

埋納状況についても想像で再現を試みた。つない

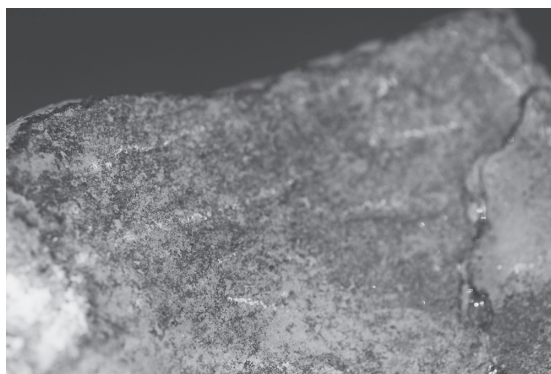


写真1 社宮司遺跡出土壺の内面

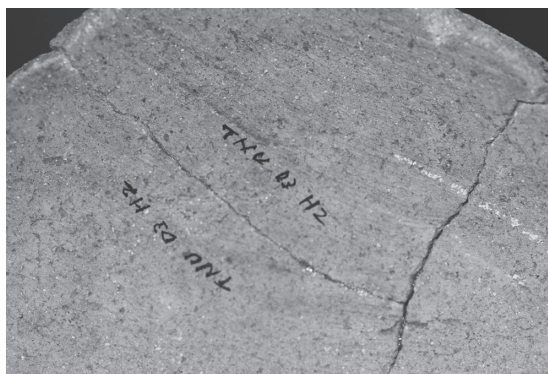


写真2 中期後半壺（佐久市西浦遺跡）の内面



写真3 後期壺（佐久市北一本柳遺跡）の内面

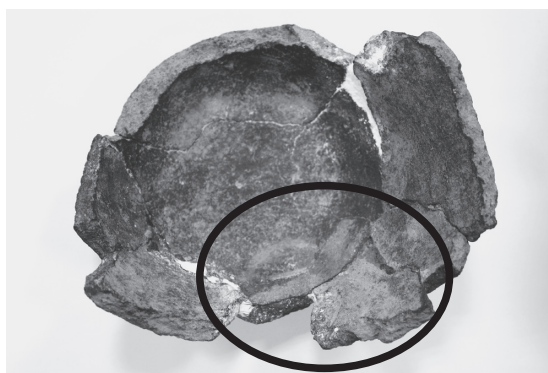


写真4 社宮司出土壺の内面に付着する錆（楕円部）



写真5 壺内に直立する板状鉄斧①

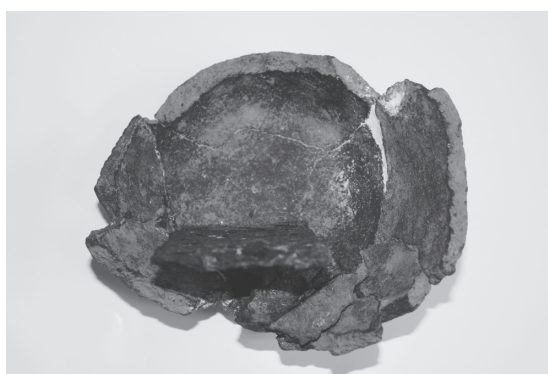


写真6 壺内に直立する板状鉄斧②



写真7 社宮司遺跡の全出土遺物

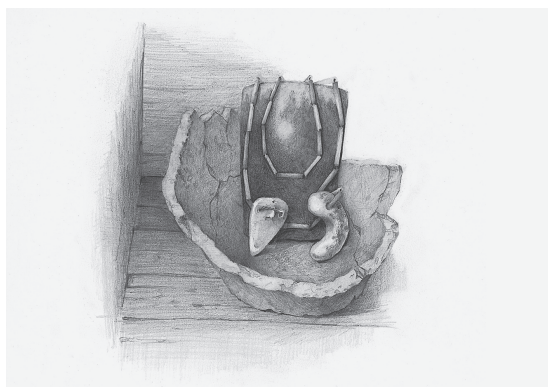


図1 埋納状態の想像復元（森泉智也氏作画）

だ装飾品を二つ折りにして鉄斧に垂れ掛けると綺麗にかけられる。木箱もさほど根拠があるわけではない。60年前の発見当時、これらの鏡片、玉類と土器は、無理なく一括で拾い上げているように思える。ごぼう掘りをしていてスポッと穴が開いたような状態になったのではないかと想像する。土器の周りは何かで覆ってあったのではないかと考え、木箱を再現してみた。

島根県荒神谷遺跡や長野県中野市柳沢遺跡などに代表される銅矛・銅剣・銅戈・銅鐸などの埋納は木箱や皮などに包まれないと言われていることを承知した上での復元である。

5. 破鏡の意味

社宮司の鏡片は破鏡である。破鏡の定義は、研磨・穿孔など2次加工が確認できることである。2003年時点で国内には161例の破鏡がある。分布の中心は、北部九州にあるが、南は鹿児島・北は東北の山形県まで認められる。東日本では各県に1・2点認められる程度なので点在的な分布である。

国内では最古型式の鏡の破鏡は福岡県福岡市須玖唐梨遺跡出土漢鏡（径10cmの銘帯鏡を破鏡、2ヶ所穿孔）で、漢鏡4期（紀元前1世紀後半～紀元1世紀初め）以降の前漢末期・王莽時代の鏡から漢鏡7期（2世紀後半～3世紀初め）の後漢後期の鏡が破鏡された。特に弥生時代後期後半、倭国乱をまたぐ2～3世紀という時期に盛んになる。

三国時代の魏で作られた三角縁神獣鏡（日本の前期古墳に埋葬される鏡・景初3年〈239〉～）の破鏡はごく少ないことから、破鏡は弥生時代後期の近畿以西に特徴的な風習であると言われている。

多鈕鏡は国内で12例、海外を含めても115例（本誌宮里論文による）確認されているに過ぎず、再加工品は社宮司以外1例もない。多鈕鏡の生産地である朝鮮にも類例がない。

こういった状況から、社宮司の破鏡は弥生後期まで数回の流転・伝世を経てから近畿以西で破鏡されて佐久の地にいたったという考えが一般的で穏当な解釈であった。ちなみに社宮司の出土品の埋納時期を後期とする見解や論文も多い。

ところが、今回の社宮司の土器の観察結果では、後期埋納の可能性よりも、中期埋納の可能性が出てきている。もし、これが事実であれば社宮司の破鏡は国内最古の破鏡ということになってしまう。長年積み重ねられた破鏡研究の歴史からみれば、非常に不都合な事態になる。

鏡ではないが、ガラス璧など舶載の貴重品の分割は伊都国の存在が有力視される福岡県前原市三雲小路遺跡2号墓でも確認されている。破鏡の上限が、今後の発見でさかのぼってくれることを祈っている。

6. 結 語

—長野県佐久地域に多鈕鏡が存在する意味—

社宮司の多鈕鏡片の埋納時期は、土器の観察結果がでるまで一時保留せざるを得ないが、いずれにしても破鏡の情報・知識など弥生時代の信濃では知る由もないので、他の地域で加工されたのちに信濃へもたらされたものと私は考える。

考古学の宿命で、現状未発見であっても新たな発見により分布の空白が埋まることは多々ある。しかし、社宮司例を除くと北部九州と山口県、大阪・奈良県などの近畿地方にしかその存在が認められない多鈕鏡は、今後どんなに調査が進展しても日本列島各地の空白を埋めるとは考え難い。今後、なぜこんな珍品が飛び地方的に信濃へもたらされたのかを深く掘り下げ、本年中には稿を改めて考察する予定である。

弥生中期の産物では、弥生時代研究者を驚愕させた中野市柳沢遺跡出土銅戈・銅鐸や大町市海ノ口神社所有の大阪湾型銅戈、千曲市箭塚の細型か中細型の銅剣など過去に出土したシナノの青銅器と併せて考える必要がある。そこからは、弥生時代中期におけるシナノが青銅器の生産地・供給地から特別視された地域であった実像が浮かび上がってくるのではないかと考えている。

ちなみに弥生後期は木島平村根塚遺跡から朝鮮半島南部伽耶産とされる柄に渦巻き模様をもつ鉄剣、兄弟型式の樽式土器文化圏である群馬渋川市有馬遺跡からは長剣が出土している。このため、信濃から毛野の国一帯は倭国乱前夜（紀元2世紀後半）の日本列島にあって丹後や出雲の当時の有力な諸地域と同様に鉄の輸入をめぐる朝鮮半島南部と独自のチャンネルをもつ地域であったと考えることも可能である。

こういった海外との関係も視野に入れながら、今後も信濃の弥生中期（「…分かれて百余国…」『漢書』）～後期（「…倭国乱れ相攻伐して年を歴たり、乃ち共に一女子を立てて王となす。名付けて卑弥呼という…」『魏志倭人伝』）の社会像を考えていきたいと思う。

（佐久考古学会・御代田町企画財政課）

参考文献

- 岡村秀典1999『三角縁神獣鏡の時代』
- 佐原 真2005「Ⅰ 考古学の方法 1 原始・古代の考古資料」『佐原真の仕事1 考古学への案内』
- 高橋 敏2003「最北の破鏡」『研究紀要』創刊号 山形県埋蔵文化財センター
- 難波洋三2011「弥生の祭器」『平出博物館紀要』第28集
- 森岡秀人1994「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」『第35回埋蔵文化財研究集会「倭人と鏡」－日本出土中国鏡の諸問題－』の当日追加資料より
- 宮里 修2008「多鈕細文鏡の型式分類と編年」『考古学雑誌』第92巻第1号

社宮司遺跡出土の 多鈕無文鏡をめぐって

小林 青樹

1. はじめに

社宮司遺跡は、多鈕鏡の破片とともに、板状の斧、そして多数の管玉と極めて大きい翡翠の勾玉を一緒に壺に納め、土中に埋納した祭祀遺跡である。こうした祭祀遺物は、非日常的で特別なものであると見なされる。しかし、社宮司遺跡で玉類や鉄斧が伴っていたように、祭祀具の対象は本来、日常・非日常の区別がない。おそらく文字をもたない弥生人は、ものだけでなく身の回りの景観や身振りなどにも特別な意味を重ね合わせ、また連想し、祭祀・儀礼の媒体にしたのであろう。

筆者は、最近、こうした特別な意味を連想した対象を「象徴媒体」と呼び、これを媒介として様々な祭祀・儀礼が実践されたと考える。そして、祭祀遺物という括りは、この象徴媒体のうちの「モノ」の総称として用いられる。それでは、今回問題とする社宮司遺跡出土の多鈕鏡には、一体どのような意味を弥生人は連想

し、祭祀・儀礼を行ったのであろうか。この問題を考えるためには、社宮司遺跡から出土した多鈕鏡の起源に遡って考える必要がある。

2. 社宮司鏡片の起源と系譜

多鈕鏡は、中国東北地方で出現した紐を通す鈕を複数もつ鏡である。この鏡は、その後、朝鮮半島で「多鈕細文鏡」という鏡背の文様が極めて精緻な鏡となり、日本列島に伝播した。

社宮司遺跡出土鏡は、最も東で出土した多鈕鏡である。今回の再検討の結果、筆者と宮里修は、鏡背に文様をもたない特徴を重視して、新たに「多鈕無文鏡」と呼ぶことにした。多鈕無文鏡の類例は、中国の遼東地域と韓半島にあるが例数は少ない。この辺の事情については、宮里修氏の論考に譲る。

今のところ、最古の多鈕鏡は、遼寧省の西部と接する内蒙古自治区の南、夏家店上層文化の代表的遺跡である寧城小黑石溝遺跡98M5墓から出土している鏡で(図1-3)、西周末から春秋初期の頃のものである(内

蒙古文物考古研ほか2007)。
こうした多鈕鏡の鏡背には、三角形の内部に細線を充填するものを基本モチーフとする「三角文系連続Z字文」と筆者が呼ぶ文様が施される(図1-3)。この文様は、新しくなるにつれて次第に崩れていき、韓半島に伝わると三角形を規則的に配置した星形の図形へと変化する(図1-4)。そして、この文様が精緻な細線化を達成して多鈕細文鏡が誕生する。この星形

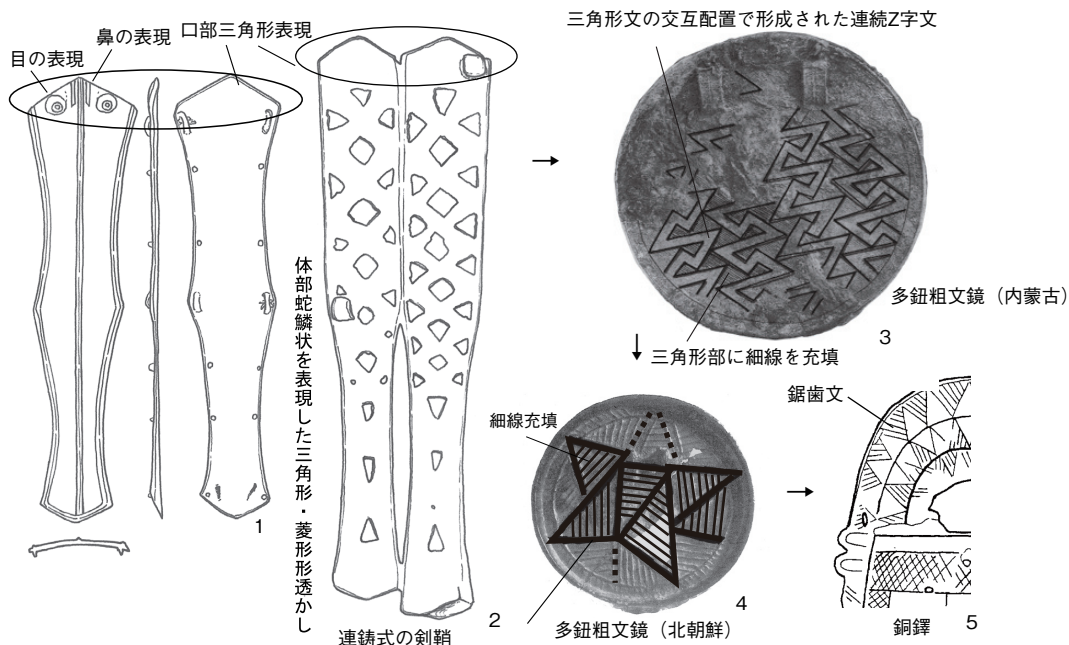


図1 蛇形劔鞘・多鈕鏡・銅鐸(縮尺不同)

[1 熱水湯・2 必斯宮子・3 小黑石溝98M5・4 伝成川・5 弥生銅鐸の鋸歯文]

を形成する個々の三角形(中に細線を充填した)が「鋸齒(きょし)文」であり、この文様は銅鐸・器台・盾など、弥生時代から古代にいたる様々な器物につけられた特殊な文様である。

この三角文系連続Z字文の祖型は、銅製の剣の鞘(さや)の本体の三角形の透かしに求められ(図1-2)、これが鏡の文様に取り込まれたとき、三角形を左右と上下に交互に配置し、これら三角形の間の隙間の部分がZ字状の文様が連続するようになった。さらに、三角形透かしの起源は、銅製剣鞘自体をヘビに見立てた例(図1-1)があることから、ヘビの体のウロコやマムシの三角形の頭部が候補となる。以上のように、多鈕鏡の文様には、三角形をヘビの象徴とみなし、さらに毒で敵を倒すというヘビの意味が重ね合わされている。このような邪悪な対象を避けるものを辟邪(へきじゃ)と呼んでいる。銅鐸が辟邪として機能したという説は、このような文様の意味と関係があるろう。

こうした多鈕鏡の用途について甲元眞之は、中国東北地方の民族例のなかに、大形の鏡を服に縫い付けて使い、また小形の鏡は木や枝につり下げて使う例があることから、シャーマンの持ちものであったと考えた(甲元 2006)。先の筆者の文様の意味の推定からみれば、多鈕鏡を身体に取り付けるなどして、太陽の光を反射して悪霊を惑わす辟邪の役割をもったのであろう。光彩を放つ銅鏡の特徴と辟邪の文様は、共に同じ意味として多鈕鏡に重ね合わされ祭祀・儀礼で機能したと推定されるのである。そして、社宮司鏡は文様をもた

ないが、鏡自体が辟邪の意味をもつと考える。

3. 社宮司鏡片にみる「戈形」の象徴的伝統

多鈕鏡の意味はわかったが、社宮司鏡は小破片であり、場合によっては数百年前の鏡である。弥生人が本来の鏡の意味をすべて知りつつ埋納したとは考えられない。鏡が再加工された後、弥生人が新たにこの鏡片にまた特別な意味を連想し、埋納したことが予想される。

あらためて社宮司鏡の形状をよくみると、破片とはいっても、破断面を研ぐ、あるいは鈕の頭を研いで平らにするなど、何らかの形を意識しているのは間違いない。そこで、仮に長軸に垂線を引くと、左右が非対称な形状である。現在、このゆがんだ三角形の底辺側に3カ所の穴があるが、このうち、1カ所(C)は、元々鑄上がりの悪さによって生じた穴で、ドリル状の鋭い工具で穿孔したのはAとBの2つであろう。この2つの穴は、Bについてはあえて水平に研いだ鈕の上からあけており、また、Aにいたっては、この周りに何度も穴をあけようとした箇所が複数ある(D)。もし、この鏡片をペンダントとして使うのであれば、Cの穴だけで事足りるわけであり、その他に2箇所も穿孔をあけるこだわりは、装飾品とは関係のない別の意図によるものであると考えたほうがよいだろう。

それでは、こうした穿孔などの特徴は何を示すのであろうか。筆者は、この左右非対称の形と穿孔のあり方は、「銅戈」をイメージしたものであると考える。銅戈といえば、最近多数の銅戈が発見された中野市柳

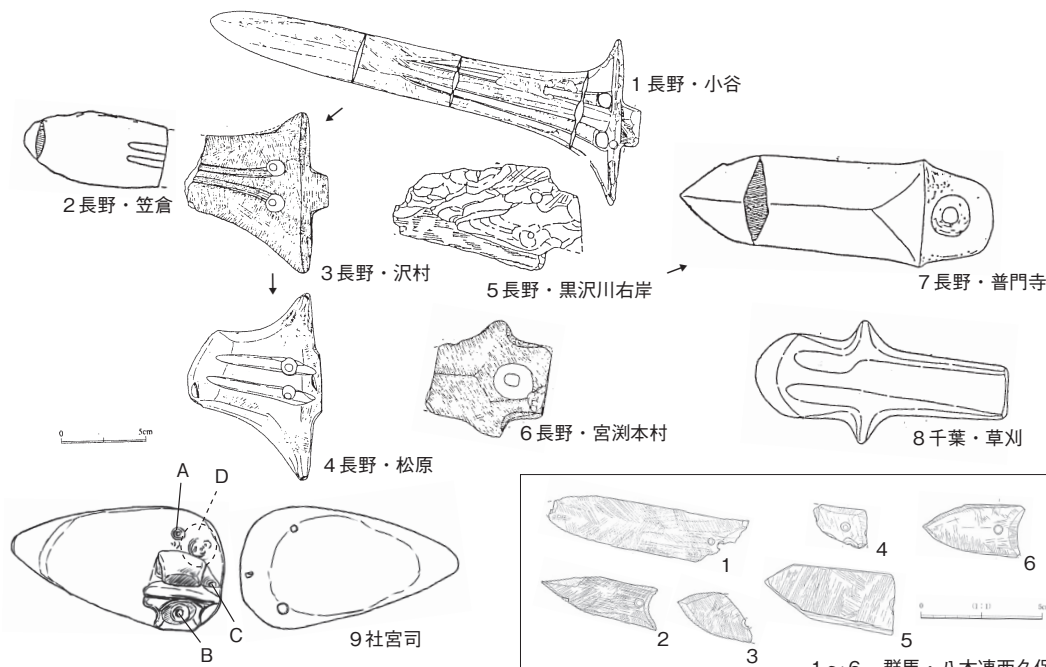


図2 社宮司の多鈕無文鏡片と銅戈・石戈・有角石器
(9: 縮尺不動・全長4.2cm)

図3 「戈形」の磨製石鏃
1~6 群馬・八木連西久保

沢遺跡が有名であり、そして、長野県の弥生中期には、この銅戈をモデルに石戈が多数作られた（石川 2010）。戈の本体は左右対称の形状ではなく、また穿と呼ぶ孔を2つもつのが特徴である（図2-1）。おそらく、銅戈、そして石戈の「戈形」の特徴を、破片となった多鈕鏡に重ねて表現した、というのが筆者の解釈である。

戈は、古代中国で最初に登場した武器で、鉤状の形状から辟邪の意味をもち、また弥生時代の武器のうち唯一絵画に表現され、さらに青銅製のなかで最も東方から出土する特別な武器である（小林 2006a）。弥生絵画で、戈のみを取り上げている例は、「戈形」に象徴的な意味があることを示している。

このような解釈が成り立ちうるとすれば、さらに銅戈や石戈の分布する長野県から群馬県にかけて、中期末から後期初めにみられる磨製石鏃とされるものも「戈形」の特徴を表現した可能性がでてくる。主として栗林式土器とその系統の土器分布圏にみられる磨製石鏃とされるものは、穿孔をもち、その起源については金属製鏃模倣説・磨製石鏃説などがあり、用途については漁労具説・祭祀具・威信財説などがある。井上慎也等が指摘するように、確かに、石鏃として矢柄に装着されるとしたら、穿孔は意味がない（井上 2010）。群馬県富岡市八木連西久保遺跡では、石鏃のように基部が凹むものもあるが、戈を彷彿とさせるようなものもある（山武考古学研究所編 1993）（図3-1）。本遺跡からは、銅戈の破片や石戈も採集されており、関連性がありそうである。基部が凹むものは、石鏃の系譜を考えるべきであるという意見もあるだろうが、石川日出志が石戈の分類で示したように（石川 2010）、双孔石戈のうち、富岡市鍋川河底例や長野市松原遺跡例（図2-4）のように、内（柄に差し込む茎部）が極端に縮小あるいは消失したものがあり、戈形の可能性もある。左右の翼の大きさやアンバランスさは、まさに「戈形」の特徴である。

以上から、少なくとも磨製石鏃とされるもののなかには、「戈形」の特徴を表現した「ミニチュア石戈」の可能性のあるものが含まれている可能性がある。これに利用された石材は、キラキラ光る緑泥片岩を使っており、あるいは銅の輝きを意図したものかもしれない。こうした状況がすべて関連性のある出来事であるとすれば、弥生時代の中期後半から後期初等頃に、「戈形」という「戈」の形を連想させるような一定の形状のパターンが銅戈・石戈・ミニチュア石戈など複数のモノに徹底するような象徴の伝統（筆者はこのようなものを「象徴伝統」と呼ぶ）があったのであろう。そして、栗林式土器の分布圏を中心にこの「戈形」の象徴伝統が形成されていたと理解できる。さらに、石川

日出志が指摘するように、石戈の影響は、有角石器（図2-8）に引き継がれ、さらに東方にまで及んでいたものであり（石川 2005）、東日本全体に「戈形」の象徴伝統が広がっていたことになる。社宮司の鏡片は、それ自体稀で貴重な存在であるが、その鏡片を利用した弥生人の祭祀世界の奥深さを物語っているのである。

4. 社宮司鏡片埋納の風景

銅戈は、その辟邪としての意味から、西日本および柳沢遺跡までほとんどが埋納された。これと同じような意味のなかで社宮司の埋納も行われたのであろう。なぜ、銅戈を埋納したのかというと、それは辟邪を埋納することによって、自然の脅威などを除く、あるいは封じ込めるためである。社宮司の場合は、たびたび噴火を起こす浅間山、そして洪水となって牙を向く千曲川に畏怖の念を抱き、辟邪の象徴である多鈕鏡をさらに同様な意味をもつ戈の形に再加工して埋納し、自然の脅威を鎮めようとした、というのが筆者の解釈である。戈はマイナスな状況をプラスの状況へと導く役割をもっていたのであり、結果的に山と川の恵みをもたらす山川の神への信仰心の表れでもあり、こうした表裏一体の信仰心が埋納という祭祀行為として実行されたのであろう。

社宮司遺跡周辺を発掘したところ、生活痕跡を見いだせなかったのは、まさにこの地がそうした祭祀を実行する聖なる場であることを示している。なお、多鈕鏡の埋納習俗は、韓半島そして西日本でもみられた伝統であり、それが佐久でも実践されていたわけである。

以上のように、社宮司の鏡片は、極めて小さいものであるが、その鏡に刻まれた歴史は古代中国にまで遡り、そして佐久の弥生人の崇高な自然に対する信仰心を知ることができる貴重な資料である。

（國學院大學栃木短期大学）

主要引用参考文献

- 石川日出志 2010「東日本弥生時代中期の青銅祭器と模倣石製祭器」『2010年度大学院学内成果報告書』明治大学大学院文学研究科
- 井上慎也 2010「群馬県における弥生時代後半の石器組成と地域性」『法政考古学』第36集
- 甲元眞之 2006『東北アジアの青銅器文化』同成社
- 小林青樹 2006a「弥生祭祀における戈とその源流」『栃木史学』第20号
- 山武考古学研究所編 1993『八木連西久保遺跡他 群馬県営は場整備事業（妙義中部地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 内蒙古文物考古研究所・東北亜歴史財団 2007『夏家店上層文化の青銅器』

朝鮮半島からみた 社宮司出土の多鈕鏡

宮里 修

1. 多鈕鏡とは

多鈕鏡は紐を結びつける摘みが複数個（主に2個）付いた鏡で、紀元前一千年紀の長い期間、中国東北地方から日本列島（以下、日本）にいたる東北アジア一帯で用いられた。円形で、磨き上げた反射面をもつために鏡と呼ばれてはいるが、くぼんだ反射面は姿見に適さず、一般にはシャーマンの用いる道具であったと考えられている。

多鈕鏡は、現在までに115例が知られている※。地域別にみると中国東北地方に19面、朝鮮半島（以下、朝鮮）に76面、日本に12面がある。また多鈕鏡には、文様の線が太い「多鈕粗文鏡」、文様の線が極めて細い「多鈕細文鏡」、そして文様のない「多鈕無文鏡」がある。これら種類別にみると粗文鏡が43面、細文鏡が59面、無文鏡が11面となる。中国東北地方には粗文鏡のみ、朝鮮には粗文鏡と細文鏡がそれぞれあり、日本はほぼ細文鏡のみがある。こうした地域ごとの特徴は、中国東北地方で誕生した粗文鏡が、朝鮮で独自の細文鏡に変化した後、日本に伝わったという多鈕鏡の歴史を反映している。

筆者は以前、朝鮮の多鈕鏡について文様などを詳しく検討し（宮里 2001・08）、中国東北地方から伝わった粗文鏡が細文鏡へと変化し発展する過程を5つの段階に整理した（図1）。日本で出土した12面の多鈕鏡は、当時の弥生社会に精緻な土製鋳型をつくる技術がないことから、朝鮮で製作されたものが伝わったと考えてよいが、これらは多鈕鏡の5つの段階のうちの第4・5段階にあたる。朝鮮で細文鏡が著しく発展した時期の製品である。弥生社会の側からいえば、多鈕細文鏡は、弥生時代前期末に細形銅剣・銅矛・銅戈などと共に伝わってから中国鏡が本格的に伝来する中期後半まで用いられた。多鈕鏡は日本で製作されなかったため、他の青銅武器のように日本化（大型化）することはなかった。

2. 日本出土の多鈕鏡

日本出土の多鈕鏡には、里田原3号甕棺墓（長崎

県平戸市）、原の辻遺跡大原地区（長崎県壱岐市）、宇木汲田12号甕棺墓（佐賀県唐津市）、本村籠58号甕棺墓（佐賀県佐賀市）、増田 SJ6242（佐賀県佐賀市）、吉武高木3号木棺墓（福岡県福岡市）、若山遺跡埋納土坑（福岡県小郡市・2面）、梶栗浜石棺墓（山口県下関市）、大県遺跡（大阪府柏原市）、名柄遺跡（奈良県御所市）、そして社宮司遺跡（長野県佐久市）の12面がある。北部九州に集中するのは地理的位置から自然であるが、有明海沿岸にやや偏ることは弥生社会と渡来人の関係を考える上で興味深い。また、北部九州と異なる青銅器文化圏にあった畿内に多鈕鏡が伝わったことも、弥生時代における地域間の関係を考える上でまた興味深い。しかしながら社宮司出土の多鈕鏡は、こうした水準で問題を設定することが難しい特殊な資料である。

社宮司鏡について解決したい問題には伝播経路など様々あるが、ここでは「社宮司出土鏡はいかなる多鈕鏡か」について考えてみる。

3. 朝鮮の多鈕無文鏡

社宮司出土の青銅片が多鈕鏡だといえるのは、永峯光一（1966）の復元案で示されたように、鈕が細腰形で且つ鏡縁側に偏ることによるが、多鈕鏡の体系における位置を探るとき、大きな手掛かりとなるのは、文様がないこと、すなわちそれが多鈕無文鏡であるということである。

前述のように多鈕無文鏡には11例がある。地域別の内訳は中国東北地方が5例、朝鮮が5例、そして日本の社宮司鏡である。多鈕鏡115例のうちでは10%に満たない少数派である。

朝鮮出土の多鈕無文鏡には、忠清南道礼山郡東西里石槨墓から出土した1面、平壤市貞栢里遺跡の2面、伝霊岩出土鋳型のうちの1点、慶州市朝陽洞5号木棺墓の1面がある（図2）。

それぞれについて特徴をみていくと、東西里鏡は直径9.4cmで反りがなく、断面半円形の鏡縁は幅が狭く薄い。鈕は双鈕で断面台形、いずれも鈕の鏡縁側が紐ずれにより摩滅している。鈕の側面観は隅丸台形、鈕孔は歪な楕円形で中子は通して設置された。鏡面は磨き上げられるが、鏡背面にはあばた状の凹凸がひろがり鋳上がりはよくない。東西里鏡は相伴した多鈕粗文鏡によれば多鈕鏡の第2段階にあたる。朝鮮独自の多鈕粗文鏡が形成される段階である。この段階には朝鮮の青銅器は日本に伝わっていない。

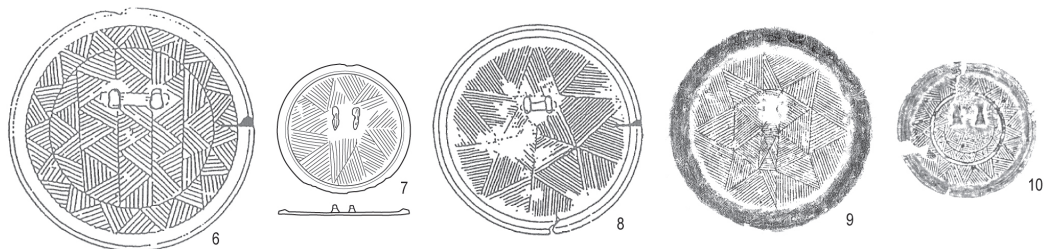
貞栢里鏡は同型の2面であり、傷の箇所が一致することから同范鏡と報告された（榎本 1969）。直径は7.4cmで、鏡面はほぼ平坦、鏡縁は断面三角形で幅が狭く薄い。鈕は双鈕でやや間隔を空けて中軸線上に位置



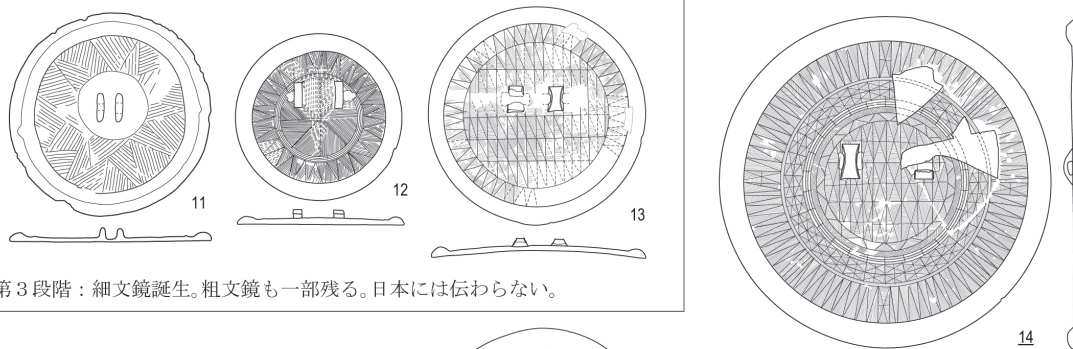
中国東北地方：次第に幾何学文が崩れる。



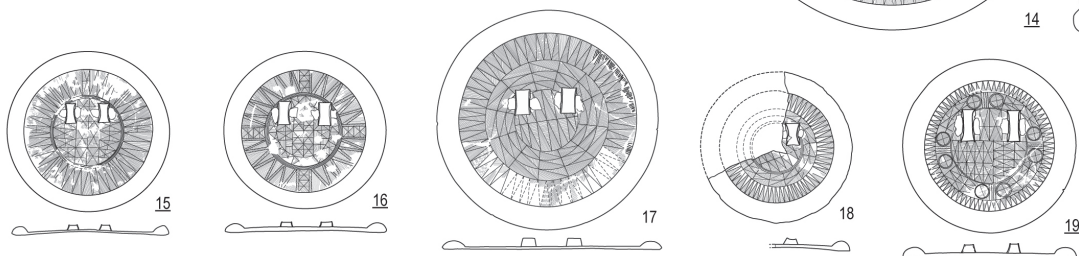
第1段階：二重線で文様を描き平行線を充填。次第に縦方向の区画へ。



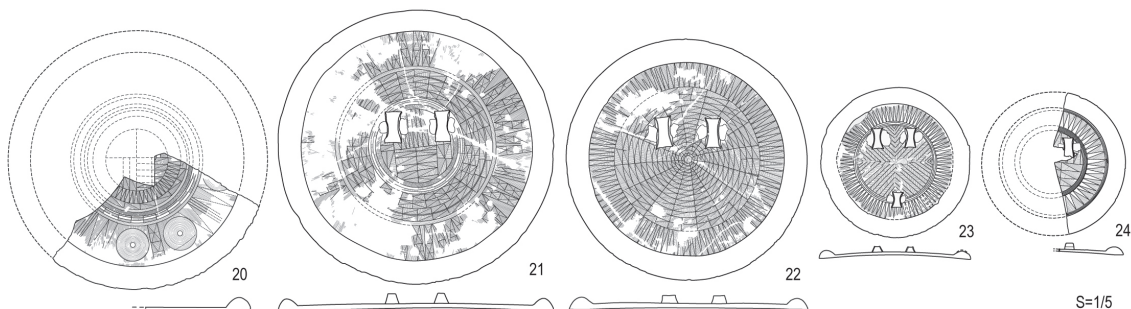
第2段階：朝鮮独自の粗文鏡誕生。著しく多様化。朝鮮の西半分に分布。日本には伝わらない。



第3段階：細文鏡誕生。粗文鏡も一部残る。日本には伝わらない。



第4段階：細文鏡が多様化。分布が拡大し、日本へ伝わる。



S=1/5

第5段階：細文鏡の組合せが形式化。大型で文様が複雑、中型で文様が簡素、小型三鈕の3種。日本に伝わる。突如消滅する。

図1 多鈕鏡の変遷

(1. 遼寧省本溪市梁家村, 2. 遼寧省建平縣炮手營子, 3. 平壤市新成洞, 4. 伝成川郡, 5. 祥明大所藏, 6・8. 全州市 如意洞, 7. 礼山郡 東西里, 9. 伝中和郡, 10. 大田市 槐亭洞, 11・12. 扶餘郡九鳳里, 13. 伝慶尚南道, 14. 柏原市大畠, 15. 唐津市宇木汲田, 16. 佐賀市本村籠, 17. 襄陽郡 釘岩里, 18. 牙山郡 宮坪里, 19. 福岡市吉武高木, 20. 唐津郡 素素里, 21-23. 咸平郡 草浦里, 24. 和順郡 白巖里)

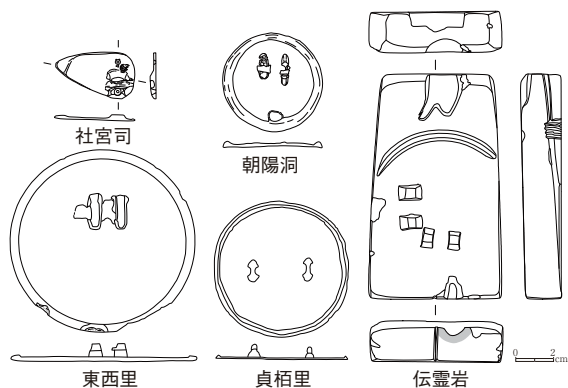


図2 社宮司鏡と多鈕無文鏡

する。鑄放して銅質も悪いという。貞栢里鏡の鏡縁や鈕の形態は粗文鏡に特有のものであり、中心付近に鈕が位置するのも多鈕鏡第2段階の特徴である。東西里と同じ段階に属するとみてよい。

伝靈岩鑄型鏡は復元径が約8cmで、双鈕と断面半円形の鏡縁により多鈕鏡と判断できる。方向を違える二組の双鈕があるが、いずれも未完に終わっている。鈕は幅の広い細腰形で、現状では鏡面は平坦となる。細文鏡段階には無文鏡が確認されておらず、また細文鏡は土製鑄型で製作されたと考えられるため、伝靈岩鑄型鏡がいかなる製品を意図したものであるのか分からない。伝靈岩鑄型鏡は、逆の面に彫られた有肩銅斧が細形銅剣段階の青銅器であり、また多鈕鏡自体の特徴からも多鈕鏡第3・4・5段階に位置づけられる。日本に伝わった多鈕細文鏡の時期と重なるが、そもそも多鈕無文鏡の事例であるのかがはっきりしない。

朝陽洞5号木棺墓鏡は直径5.3cmで、鏡面はくぼむが縦横軸で反りの程度が大きく異なる。鏡縁は細文鏡に通有の断面半円形である。双鈕は大部分が欠失するが、紐状鈕でアーチ状の側面観であったと推定される。鈕孔は円形で中子は個別に設置された。鏡面は布による補修のため状態が確認できない。鏡背面は粗く凹凸やひび割れがある。下方の鏡縁に接する鏡胎部分には7mm大の歪な穿孔がある。鏡縁側が摩滅しており紐で結わえ懸垂したことが分かる。朝陽洞鏡について違和感を感じるのは重量の軽さであり、材質が青銅であることも確信できない。朝陽洞鏡は、多鈕鏡の消滅後、多鈕鏡の製作圏外に出現したものである。朝鮮および日本ではこの頃から中国鏡の伝来が本格化する。

中国東北地方もあわせてみると、多鈕無文鏡は多鈕鏡第2段階に集中する傾向がある。第3段階以降の事例は、現状では一般化が困難な特殊例である。

4. 謎の社宮司鏡

以上を踏まえて社宮司鏡の特徴を改めて整理してみる。

鏡縁の扁平さはおそらく再加工の結果であるが、いくらか幅がある点において、例示した第2段階の無文鏡とは異なる。より細文鏡に近いともいえるが、粗文鏡でも断面半円形の鏡縁に対応するものがある。

社宮司鏡は銅質が極めて良い。例示した無文鏡はいずれも銅質が悪い。粗文鏡も鑄肌は粗いものも多く、より細文鏡の質に近いといえる。

社宮司鏡の鈕はやや幅広の細腰鈕である。細腰形の鈕は細文鏡段階に定型化するが、社宮司鏡の場合は、鈕の両側縁に細隆起線がなく細文鏡の鈕とは異なる。むしろ粗文鏡段階の細腰鈕に近いが、一方で伝靈岩鑄型鏡の鈕ともよく似ている。

結局のところ、社宮司鏡は多鈕鏡の体系の中にうまく収まらない。現状では未知の多鈕鏡に可能性を求めるほかない。粗文鏡が日本に伝わっていないことを考えると、伝靈岩鑄型鏡から類推される細文鏡段階の無文鏡がひとつの候補となるだろう。

他方、朝陽洞5号木棺墓は社宮司遺跡と時期的に近い。朝陽洞鏡のような脈絡のなかで製作されたとすると、伝統的な多鈕鏡製作圏外における模倣品ということになる。しかしながら、朝陽洞鏡の特徴は社宮司鏡と大きく異なる。模倣鏡の観点でみれば日本で製作された可能性もあるだろうが、想像の域を出ない。

ここに提示した可能性はいずれもまだ見ぬ資料が頼りである。現状では「類例の増加に期待する」という残念な結論を導くほかない。

(高知県埋蔵文化財センター)

※2008年の集成後、中国遼寧省朝陽市袁台子遺跡の採集品1面、韓国慶尚南道泗川市月城里石槨墓の細文鏡1面、全羅北道完州郡徳洞遺跡の粗文鏡1面、完州郡新豊遺跡の細文鏡7面、済州島倪來洞の細文鏡1面が加わった。

引用参考文献

- 榎本杜人 1969「陽遂と多鈕細文鏡」『考古学雑誌』第55巻第1号、1-15頁、日本考古学会
- 永峯光一 1966「鏡片の再加工と考えられる白銅板について」『信濃』第18巻第4号、29-32頁、信濃史学会
- 宮里 修 2001「多鈕粗文鏡について」『史観』第144冊、65-84頁、早稲田大学史学会
- 宮里 修 2008「多鈕細文鏡の型式分類と編年」『考古学雑誌』第92巻第1号、1-32頁、日本考古学会
- ハングル
- 国立慶州博物館 2003『慶州 朝陽洞遺跡Ⅱ』国立慶州博物館学術調査報告第13冊
- 池 健吉 1978「礼山東西里石棺墓出土 青銅一括遺物」『百済研究』第9輯、151-181頁、百済研究所

社宮司遺跡の 多鈕無文鏡によせて

設 楽 博 己

1. 北信地方と北部九州地方

信濃地方では、弥生中期後半以降、西日本に系譜が求められる青銅器や鉄器などの威信財や実用品が数多くみられるようになる。上田市上田原遺跡の鉄矛、上田市上の平遺跡の巴形銅器、大町市海ノ口諏訪社に伝わる近畿型銅戈、千曲市若宮箭塚遺跡の細形銅剣などである。松本市宮渕遺跡出土銅鐸破片のように三遠地方のものもあるが、巴形銅器や鉄矛などその多くは北部九州に系譜が求められる金属製品であることに加えて、大半が諏訪湖盆よりも北部から出土していることは、伝播経路が日本海域であったことを示唆している。

北部九州方面との交流は、松本市石行遺跡の縞模様のある磨製石剣からわかるように、縄文晩期終末にさかのぼる。土器を焼成する前に赤く塗り、焼成によって吸着させるいわゆるスリッパ焼成は西アジアから中国、朝鮮半島に起源が求められる農耕民の土器製作技術であるが、縄文前期の特殊例などを除外すれば、日本列島にその技術が定着するのは北部九州の夜臼式期である。その後縄文晩期末から弥生時代にかけて、スリッパ焼成は北部九州から日本海を経由して石川県御経塚遺跡、乾遺跡、新潟県大塚遺跡など北陸地方に伝播した。長野県域ではやはり石行遺跡にみることで、東海地方にその技術は伝わらないので、信濃地方には北陸地方から及んだとみてよい。

社宮司遺跡は長野県域の北半に位置しており、多鈕無文鏡の来歴も、北部九州との日本海を通じた古くからの交流を背景に理解していく必要がある。この点に関係した、北信地方での二つの興味深い考古事象について考えてみたい。

2. 榎田遺跡の磨製石器生産

一つは長野市榎田遺跡の磨製石器生産である。榎田遺跡では、遺跡の裏山500mに産する玄武岩あるいは変輝緑岩という硬質な火山岩を用いて、太型蛤刃石斧や扁平片刃石斧などの大陸系磨製石器を集中生産している。ここで半製品にして近隣の松原遺跡に送り、製品に仕上げるというシステムが成立していた。大きいもので長さ20cm、重さ1400gを超えた太型蛤刃石斧も生産され、胡麻斑の入った深く濃い緑色の美しい形をした榎田産磨製石斧はまさにブランド品の風格がある。50km離れた遺跡でも、榎田産太型蛤刃石斧の比率は9割近くであるとともに、その分布は驚くほど広く、千葉県域や静岡県域という直線距離で200kmを超える範

囲にまで達する。これらのなかには見たところ未使用品も相当数含まれているようであり、威信財として流通していた可能性も考えられよう。

このような生産体制と製品の広域流通は、栗林式土器文化の人々が独自に考え出したことであろうか。福岡市今山遺跡は太型蛤刃石斧を中心とした石器生産遺跡である。今山に産する玄武岩を用いた長さ20cm、重さ1500gに及ぶ製品は、榎田遺跡のそれに近い。流通の範囲は100kmを超え、遠隔地でも今山産製品の比率が高い。今山遺跡が太型蛤刃石斧を限定してつくっているのに対し、榎田遺跡では有角石器や石戈なども生産しているように、生産体制には違いも指摘できる。しかし、原産地直下型の生産遺跡であることや、玄武岩という共通の石材を用いてほぼ似た規格の製品を仕上げ、あるいは今山石斧を凌駕する流通範囲をもつ。この二者の中間にこうした類似度をもつ石器生産遺跡は存在していない。榎田遺跡が今山遺跡を介さずして成立したとは考えにくい。

栗林2式土器になると、壺や鉢形土器の無文化が進むと同時にスリッパ焼成による赤彩が著しくなる。北部九州と信濃地方の間にこの傾向は顕著ではない。中期前半からの在地的展開のなかで理解できないこともないが、やはり須玖Ⅱ式土器の影響を評価すべきであろう。このこともまた北部九州と北信地方のつながりを示すものである。

北部九州の磨製石器生産と流通は、権力と結びついて整備された可能性が指摘されている。今山遺跡がその背後にのちの伊都国の領域をひかえ、石庖丁生産を専門とする飯塚市立岩遺跡に前漢鏡を多数副葬した王墓が築かれていることからの推測である。松原-榎田遺跡の領域ではどうだろうか。松原遺跡では礫床木棺墓が20数基検出されているが、規模や副葬品などにほとんど格差はない。しかし、この点を考えるうえで注目すべき例がほかにある。

3. 柳沢遺跡の青銅器と礫床木棺墓

中野市柳沢遺跡から5点の銅鐸と8点の銅戈が出土したが、銅戈に北部九州産の中細形が1点含まれていることは、早くから指摘されていた。この事例も北部九州と北信地方のつながりを示すものであるが、ここでは礫床木棺墓に注目したい。

青銅器が出土した地点の西から礫床木棺墓群が検出されたが、ひときわ大きな1号礫床木棺墓を複数の礫床木棺墓が二重に取り巻く。1号礫床木棺墓からは、100点近くの管玉が出土し、副葬品の点においても隔絶性をみせる。墓地の構造は、佐賀県吉野ヶ里遺跡のST1001墳丘墓を髣髴させ、同時代の近畿地方の墓地よりは、よほど階層化の進行がよくうかがえる。

礫床墓自体は再葬墓の直後に出現するので、在地の系譜から生まれた余地はあるが、伽耶系の鉄剣が出土した木島平村根塚遺跡の弥生後期墳丘墓とも関係をもつと思われる、礫を貼った円形の区画のなかに礫床墓が配置される朝鮮半島の青銅器時代-鉄器時代の墓地との関係性も視野に入れる必要があろう。

(東京大学大学院人文社会系研究科)

社宮司遺跡の多鈕鏡・玉・ 鉄斧一括資料を考える

石川 日出志

佐久市社宮司遺跡の多鈕鏡片垂飾・ヒスイ製勾玉・板状鉄斧各1点と管玉25(緑色凝灰岩製10・鉄石英製15)点が弥生土器の壺内部から一括出土した事例は、これまで多くの人々が関心を寄せてきた。土器内面には鉄錆が付着し、勾玉頭部形の痕跡が観察でき、勾玉の片面と管玉13点に鉄錆が付着するので、これらが一括資料であることを誰もが確認できる点で、耕作中の偶然の発見ながら第一級の資料といえる。この一括資料への私なりの考えを述べてみたい。

まず、これら資料の所属時期については、弥生後期とする先行研究もあるが、私は中期後半の栗林期とみなす。土器は底部周辺しか現存しないので、栗林式と見たいが、吉田式まで下る可能性もある。時期判断には、長野市光林寺裏山で1902年にヒスイ製勾玉4点・管玉105点(緑色凝灰岩製34・鉄石英製71)・鉄刀1点・鉄剣2点・鉄斧5点(東京国立博物館受入れ数)が発見された事例(本村1972)と、岡谷市天王垣外遺跡で、1907年に壺の中から玉類385点(うちヒスイ製勾玉66・緑色凝灰岩製管玉152・鉄石英製管玉132・水晶製小玉10の計362点が現存)が出土した事例(戸沢1973)が参考となる。

天王垣外遺跡では壺の胴部下半が現存し、外面赤彩と下膨れの器形から栗林式土器とみて問題はない。光林寺裏山は出土状態が不明だが、蓋付き無頸壺は栗林式と断じてよい。しかし、鉄斧のうち袋部をもつ4点は明らかに弥生時代後期末～古墳時代中期に下る資料であり、原形が失われた鉄刀と鉄剣も同様に時期が下ると見た方がよい。光林寺裏山の鉄斧のうち板状鉄斧は戦国時代燕系鑄造鉄斧の再加工品である疑いがあるので、これも一括資料に含める。社宮司遺跡で板状鉄斧、光林寺裏山で鉄斧が伴うのは、南関東の事例を勘案すると栗林3期に下る可能性が高い。こうして、この2遺跡と社宮司遺跡が同時期・同類の埋納遺構(副葬品の可能性も排除できないものの)と考える。

さて、社宮司遺跡でもっとも注目されるのは、いうまでもなく多鈕鏡片である。朝鮮半島製の多鈕鏡は、日本列島で12例あるが、無文らしい本例以外はすべて細文鏡で、北部九州に集中し大阪府大泉例が最東端であるから、本例は飛び抜けて東方の出土例となる。しかも三角形の破片を研磨して、両面と破断面を研磨し、

さらに2か所を穿孔して垂飾に仕上げている。鏡面が凹面をなし、蒲鉾形の縁部内側のカーブと鈕の位置関係から多鈕鏡であることは疑いない。これをどう解釈するかはもっとも悩ましい。三角形で2孔をもつことから銅戈形と解釈する可能性もあり得るものの、一方で、当時多鈕鏡もしくは銅鏡片と認識されていたのかを疑ってみる冷静さも保持したい。勾玉などの垂飾の範疇で考えるのである。

というのも、共伴した勾玉は弥生定形勾玉(森1980)と呼ばれるタイプに属し、長さ4.615cmと、弥生時代中期の実例としては最大級の大きさの優品であることに注目したいのである。集成して検討したわけではないが、管見では奈良県唐古・鍵遺跡の中期後半(Ⅳ様式)の長さ4.6cmがもっとも大きい。製作地は糸魚川周辺であろうが、ヒスイ製定形勾玉の製作遺跡はいまだ確認されておらず、これほど大形の製品は出土例が乏しい。ヒスイと白銅質2種の垂飾が石製管玉とセットをなすとも考えることもできる。天王垣外遺跡と光林寺裏山よりも資料数は少ないものの、この2種の垂飾の稀少性はそれを補って余りあるとみたい。

次に、多鈕鏡片が鉛同位体比測定で、朝鮮系鉛を原料とすることが判明していることも再確認したい(馬淵1983)。これまで西日本の弥生時代青銅器では、例えば銅鐸では外縁付鈕1式までは朝鮮系鉛、それ以後は中国華北産鉛が用いられており、中期中頃以後の青銅器はもっぱら黄河中流域の鉛となる。社宮司遺跡の鏡片は朝鮮半島製だから朝鮮系鉛なのは当然とみることもできるが、じつは朝鮮半島では弥生時代中・後期並行期の朝鮮系鉛の利用状態はなお十分明らかではない。少なくとも日本列島で出土する中期後半の資料に朝鮮系鉛を用いた青銅器が稀なことからすれば、この鏡片も中期前半、下っても中期中頃には列島内にもたらされ、いずれかの地で伝世・加工されて、最終的に佐久の地にもたらされたことになる。この鏡は、はたしてどのような一生をたどったのであろうか。

いずれにせよ共伴の管玉は上越や佐渡で製作され、ヒスイ製勾玉は糸魚川周辺で製作されたものが将来されている。北陸から千曲川流域への文物の流れの中に多鈕鏡片や板状鉄斧という西方の新文物が乗る状況は、中野市柳沢遺跡の青銅器群と一脉通じるところがある。

(明治大学文学部)

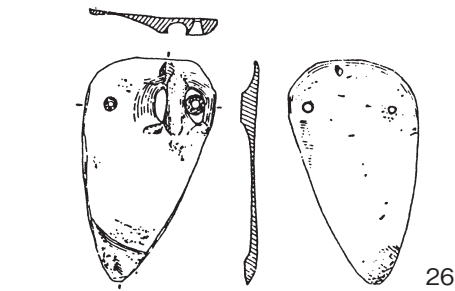
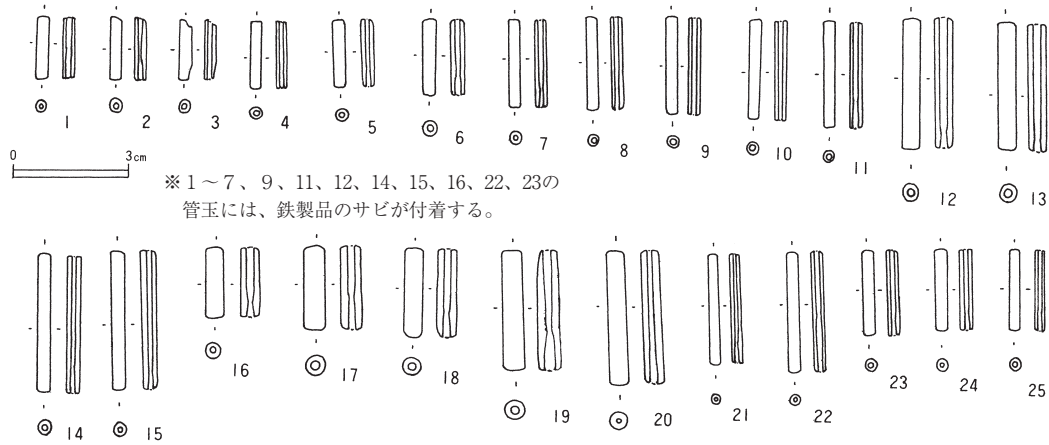
参考文献

- 戸沢充則1973「岡谷の遺跡と遺物」『岡谷市史』上巻
馬淵久夫1983「長野県出土青銅器の鉛同位体比測定」『長野県史 考古資料編1-(四)』長野県
本村豪章1972「長野市篠ノ井光林寺裏山出土遺物の研究」『MUSEUM』254
森貞次郎1980「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

表1 社宮司遺跡出土 管玉計測表

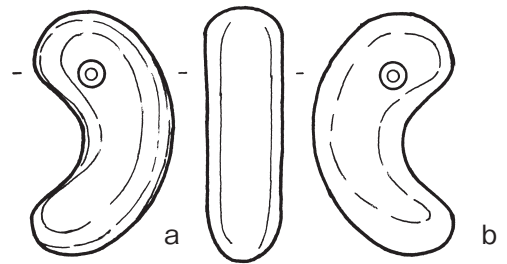
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
長さ	12.5	13.8	12.3	13.4	13.7	16	18.2	18.9	19.9	20.3	21.7	26.4	25.6	27.8	27.9	14.3	17	18	24.6	26.9	22.1	24.6	17.3	16.5	16.4
径	2.7	2.6	2.7	2.5	2.8	2.9	2.9	2.5	2.8	2.7	2.7	3.8	4.1	2.9	3.1	4.2	4.4	4	4.6	4	2.4	2.6	2.6	2.9	2.5
重さ	0.14	0.14	0.1	0.14	0.16	0.21	0.23	0.17	0.26	0.23	0.23	0.64	0.75	0.41	0.43	0.36	0.55	0.47	0.81	0.81	0.18	0.26	0.19	0.2	0.16

1～15は鉄石英、16～25は碧玉。単位は、mm、g



26

長・幅・厚 (紐部)
42.3×24.0×3.0mm
重さ6.73g

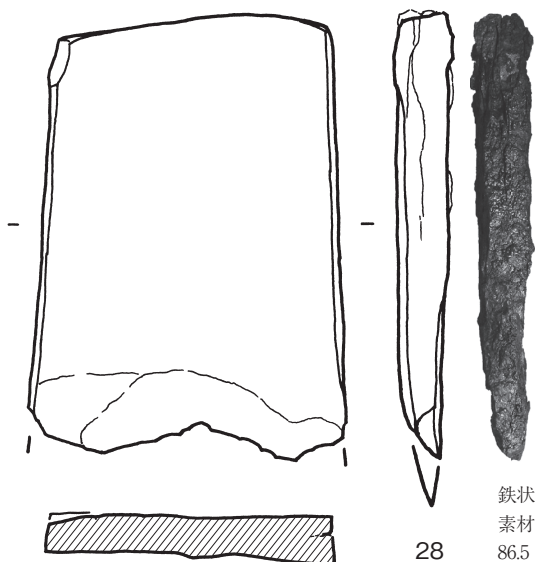


a

b

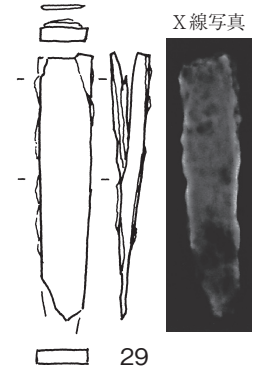
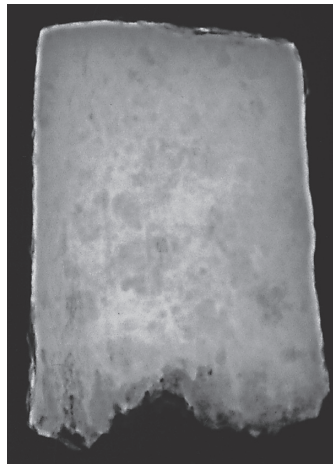
長・幅・厚
46.15×26.70×15.00mm
重さ33.24g 穿孔径5mm
b面には鉄製品のサビ付着

X線写真



28

鉄状鉄斧、側面形から片刃と判断される。
素材やサビが板状に剥離し、鍛造品か。
86.5(長)×60.4(幅)×10.8(厚)mm 重196.0g



29

長・幅・厚
51.8×12.4×4.2mm
重さ8.94g
断面は、レンズ状でなく、矩形をなす。
板状に剥離される。

X線写真

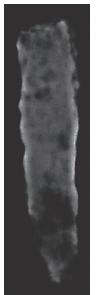


図1 社宮司遺跡出土遺物 (2/3)

社宮司遺跡の出土遺物

社宮司遺跡の出土遺物は、15-16頁に図示した。

内訳は、鉄石英の管玉15点、碧玉の管玉10点、多鈕鏡片1点、ヒスイの勾玉1点、板状鉄斧1点、細長状鉄製品1点、不明鉄製品1点、弥生壺形土器1点、である。

鉄石英の管玉：1～15の15点が出土した。濃い赤色で、一部は鉄器のサビが付着する玉もある（P15図1）。

碧玉の管玉：16～25の10点が出土した。緑色で、一部は鉄器のサビが付着する玉もある（P15図1）。

多鈕鏡片：詳細は本誌別項に譲るが、九州、畿内を越えた飛び地的分布が社宮司である（図3）。

勾玉：鮮やかな緑色をみせ、ヒスイのなかでも極上のもの。b面には接触していた鉄器のサビが付着する。

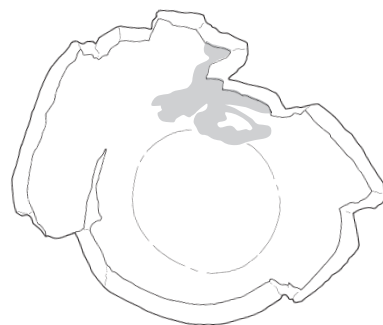
板状鉄斧：1点（28）、側面には層理状のクラックが残り、サビも板状に剥離され、鍛造品と考えられる。

側面形から片刃鉄斧であろう。

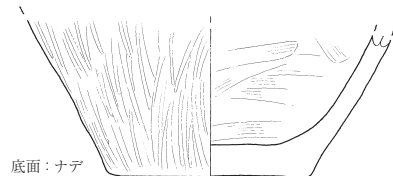
細長状鉄製品：1点（29）。先端がすぼまり始めており、両縁は平坦面をなす。板状に剥がれ、鍛造品だろうか。

鉄製品：1点（未図化）、鉄塊のようなもので、性格不明。

壺形土器：1点。上部の割れ口は、古色をみせ、発見以前の古い段階に割れていたことがうかがえる。



外面：細かなタテ方向のミガキ 内面：キメ細かな刷毛目状のヨコナデ



底面：ナデ

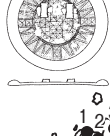
図2 社宮司の壺底部（1/3）

（アミ部は鉄サビ付着部分 底部径8cm、残存高6cm）

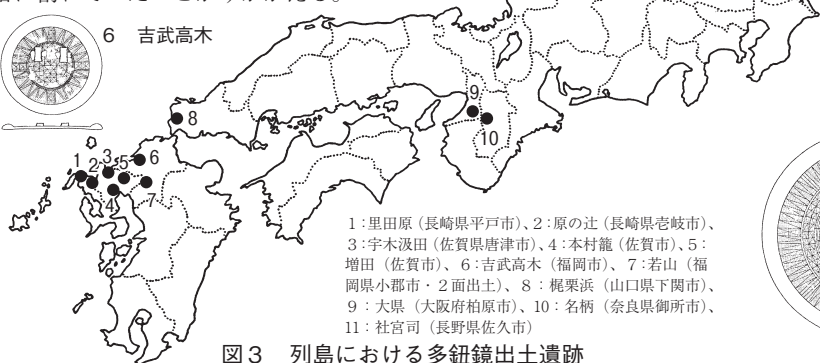
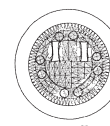
3 宇木汲田



6 吉武高木



4 木村籠

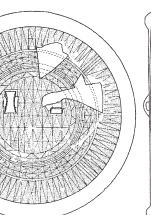


1：里田原（長崎県平戸市）、2：原の辻（長崎県老岐市）、
3：宇木汲田（佐賀県唐津市）、4：本村籠（佐賀市）、5：
増田（佐賀市）、6：吉武高木（福岡市）、7：若山（福
岡県小郡市・2面出土）、8：梶栗浜（山口県下関市）、
9：大県（大阪府柏原市）、10：名柄（奈良県御所市）、
11：社宮司（長野県佐久市）

図3 列島における多鈕鏡出土遺跡

（計12面が出土、本誌宮里氏の論考をもとに作成）

11 社宮司



9 大県

♪ 編集後記 ♪

社宮司遺跡の遺物を発見され、永年大切に保管され、快く展示させてくださる伴野稀一郎さん、ひで子さんに、まずは敬意と御礼を申し上げます。

佐久平で、どれだけの数と面積、そして予算がかかれ遺跡発掘が行われても、社宮司に優るような遺物は、これまで発見されていない。奇跡というほかない。

また、その重要性を認識され、地方学会の小冊子に、きわめて短時間でご寄稿下さった最先端の研究者の皆様にも厚く御礼を申し上げます。

それにしても、なぜここに……。社宮司をめぐる謎に興味は尽きない。（つつみ）

佐久考古通信 No.108

発行所 佐久考古学会

〒384-0091 小諸市御影新田1945-6

桜井 秀雄 方

郵便振替 00570-9-2842

☎ 0267 (32) 8922

発行日 2011年7月15日

発行者 藤 沢 平 治

編集者 堤 隆

印刷所 ほおずき書籍(株)



佐久考古学会
シンボルマーク